書　評

川内眷三　著
『古墳と地溝の歴史地理学的研究』
和泉書院　2017年12月　442頁　9,000円＋税

著者の川内眷三氏は1944年生まれ。1980年代初頭より都市化が進む大阪平野をフィールドに溜池・地溝の研究に取り組み始め，以来，30年以上の長きにわたって調査を積み重ねてこられた。以前にも2010年に『大阪平野の溜池環境』（和泉書院）を世に送り出している。

当初，著者の関心は溜池の潰廃問題にあり，地域環境の保全に力点が置かれていた。しかし，段丘地域の土地開発が地溝の開削によって進展したことから，著者の関心はやがて溜池水利の史的探究につながっていったという。本書は前著の内容と一部重複する部分もあるが，基本的には前著刊行後に発表された論文をもとに歴史地理学の研究書としてまとめられたものである。

以下に本書の構成を示すとともに，各章の概略について紹介したい。

序章
第一章　河内大塚山古墳の研究動向と周辺域古墳群の復原
第二章　近世初頭の依網池の復原と水利機能
第三章　我孫子村絵図にみる依網池水利の特殊性
第四章　復原研究にみる古代依網池の開削
第五章　一九世紀初頭狭山池水下絵図にみる水利空間と溜池環境の考察
第六章　古墳周濠の土地条件と集水機能
第七章　大山古墳墳丘部崩形にみる尾張衆黒鍬者の関わりからの検討
第八章　和気清麻呂の河内川導水開削経路の復原とその検証
あとがき

第一章は，松原市と羽曳野市の境界に位置する河内大塚山古墳とその周辺に存在した古墳群の復原を試みたものである。河内大塚山古墳は全国五番目となる墳丘規模をもつ大型前方後円墳であり，その被葬者をめぐっては諸説が展開されてきた。しかし考古学における近年の研究では継体陵の今城塚古墳と欽明陵の五条野丸山古墳の中間に位置づけられるとの見方が定着しつつある。その一方で，河内大塚山古墳の周辺に存在していたはずの古墳群については等閑視されてきた。著者は，近世の村絵図や「塚」「山」などの小字地名を手がかりとして，河内大塚山古墳周辺の段丘面に40基以上の古墳跡の存在が確実視されることを指摘する。その上で，河内大塚山古墳には陪塚がないとする既往学説に疑義を唱える。

また河内大塚山古墳は埴輪をもたない未完成の陵墓とされるが，周辺には大型前方後円墳の反正山古墳跡をはじめ，相当規模の古墳が立地していた。このことから著者は河内大塚山古墳周辺では埴輪の生産も計画されていた可能性を指摘する。従来，河内大塚山古墳への埴輪の供給は同古墳から6.5kmも離れた日置荘西町遺跡群の埴輪窯で予定されていたとする見方があったが，著者はこうした学説に対しても再考の必要性を訴えている。

第二章では，近世初期の絵図をもとに依網池の復原が試みられている。依網池は『記紀』において崇神朝の築造と伝えられる日本最古の溜池である。ところが1704（宝永元）年の大和川付け替えによって，池の中央部を新大和川が東西に貫通することとなった。以降，大和川の南北では新田開発が進み，現在では大和川の北側に依網池の一部が残存するのみの状況となっている。著者は近世初期に作成された「依羅池古図」「依網池往古之図」をもとに依網池の堤線・池岸線を現地比定する。結果として近世初期の依網池は約25,000m^{2}程度の広大な面積を有する一方，平均水深は1～1.5m程度の浅い池であった事実が明らかにされている。

さらに著者は依網池の立地する地形環境と集水域・灌漑域についても検討を加えている。その結果として，①依網池の築堤過程には2～3段階を想定しうること，②それとともに依網池の灌漑域も北東側の氾濫原から，北西側の中位段丘面へと拡大したとみられること，③灌漑域の拡大とともに，西除川の上流に築造された狭山池を頂点とする水利体系に組み込まれていったこと，などが指

摘されている。

第三章では，17世紀末頃に作成された「我孫子村絵図」をもとに，依網池の灌漑域にあった我孫子村の水利事情，および水利空間の変貌の過程が考察されている。同絵図には依網池の内部に小池が描かれ，さらにはその小池が1594（文禄３）年の検地の頃には田地として存在していたことが判明する。このことから著者は，導水困難な段丘面上にある我孫子村においては，依網池の埋積が大和川付替え以前のかなり早い段階から進行し，池床の開田化が図られていたとする。またその後，慶長期の狭山池大改修にともなう依網池利水の抜本的な見直しにより小池が開削され，小池を中心とした水利システムが形成されたものと結論づけている。

第四章は，古代の依網池についての考察である。『記紀』における依網池の築造記事は崇神朝のほか，仁徳朝，推古朝にもみえる。ただし著者は，崇神朝の依網池築造は史実でなく，実際には仁徳朝に初めて依網池が築造され，その後，推古朝に改修が行われたものとみる。そして第二章で想定された依網池の築堤過程はこれに対応し，仁徳朝には北東の氾濫原の開発が進み，推古朝に北西の段丘面上の開発が拡大したものとする。加えて推古朝の依網池改修は620年前後に築造された狭山池の築造と連動するもので，これによって依網池の機能増幅が図られ，屯倉経営が積極的に展開されたものとみる。

また著者は，難波大道の設置記事が依網池と同様，仁徳朝と推古朝にみえることにも注目し，両者の関連性を指摘している。すなわち難波大道には依網池周辺に置かれた依網屯倉の物資運搬路としての役割があり，難波大道の整備は地域整備と連動するものであったという。

第五章は，現存最古の溜池とされる狭山池に関する考察である。本章では19世紀初頭に作成された「狭山池水下絵図」をもとに，当時の水利空間の抽出と類型化がなされている。それによると狭山池の灌漑域は，村落単位の溜池に導水する第一次水利空間を基礎として，それらを包括する第二次，第三次の水利空間があり，最終的には第四次水利空間として狭山池に統括される構図をもつという。

また従来，日本の農業水利におけるこのような垂直的・統一的な水利空間の形成は，大正末期よりはじまる大規模農業水利改良政策以降のこととされてきた。しかし，狭山池の灌漑域においては，鎌倉初期までには狭山池を頂点とする垂直的・統一的な水利空間が形成されていたという。

第六章では，古墳の周濠に造営当初から用水機能が付与されていたのかどうかという問題について検討している。著者は段丘面上の微高地に位置する古墳群と，中位・高位段丘面の開析谷に位置する溜池との立地条件の違いに注目し，集水が困難な古墳の周濠には元来，用水機能はなかったとみている。

事実，近世においても大山古墳（仁徳天皇陵）の周濠を満水にするためには狭山池から導水する必要があった。古墳周辺地域での開発の進行によって，古墳周濠の溜り水が注視されるようになり，時代の経過とともに用水としての利用が促進・拡大されていったというプロセスが想定されるという。

第七章は，大山古墳墳丘部の崩形に関する考察である。この崩形については従来，後世の改変とする人為説と，地震などの外的営力による自然崩壊説が唱えられてきた。しかし著者は崩形に不自然な突地地形が確認されることから，自然崩壊説に対しては否定的な見方をしている。そして，この突地地形については，近世に水利土木技術集団の「尾張衆黒鍬者」が大山古墳周濠の浚渫に従事していること，また崩形内に「尾張谷」と呼ばれる谷筋が存在することから，「尾張衆黒鍬者」が墳丘部を掘削し，開析地を造出することによって降雨時の集水を促進し，一時に貯水量を高める効果につながったものと推定している。

第八章では，788（延暦７）年に和気清麻呂によって計画された河内川導水事業について，地形や地名を手がかりに，河内川の経路復原を試みる。その結果として，平野川の旧河道と駒川・今川が合流する地点から，奈良街道（渋川路）に沿って，茶臼山南麓の「河底池」西端部に至るまでの約2.7kmの区間が，実際に開削工事の行われた経路と推定されている。同事業は上町台地を掘削して大和川の本流・平野川（河内川）を海へ導く計画であり，その目的は洪水を繰り返す大和川の排水にあった。しかし，上町台地の掘削は困難を極め，計画全体の進捗状況としては10％程度，

工期としては1～2年程度で断念するに至ったと結論づけている。

以上，本書の内容について紹介してきた。本書の全体的な性格としては，大阪平野における利水を軸とした地域形成史と位置づけることができるだろう。本書を通読すると，大阪平野の各地において別々の時期に出現した古墳や溜池など諸々の景観要素が，時代の経過とともに有機的に結びつき，より広域の地域が形成されていった様子がよくわかる。

著者の研究手法は，近世絵図や仮製地形図・旧版地形図などを丹念に読み取り，地形・地名を手がかりとして過去の景観を復原していくという，極めてオーソドックスな歴史地理学的アプローチといえる。こうした手法に対しては，とりわけ同時代の史資料に制約がある古代の事象に関して，後世の景観に依拠してどれほど信憑性のある議論ができるのか，という批判を受けることもある。しかし一方で，確実な史資料を重視する文献史学・考古学など他分野の古代研究においては，しばしば地形条件を無視したかのような議論が見受けられることも事実である。このことから著者は，逆説的に歴史地理学的アプローチの有効性を力説するのである。

社会の変化とともに景観は変化していく。しかし，必ずしもすべてが新しい景観に置き換わってしまうわけではない。古い時代の景観の痕跡は新しい時代の景観の中にも残されている。このような前提に立つならば，歴史地理学的アプローチも文献史料や考古資料の制約を克服する一つの試みとして評価されるべきであろう。とりわけ古代に関する歴史地理学的な景観復原研究は，仮説の提示という側面が強い。その仮説は新たな史資料の発見によって実証されることもあれば，あるいは見直しを迫られることもあるだろう。しかしその繰り返しによって，過去の事象に対する理解の精度が高められていくのである。歴史地理学の伝統的な研究手法によっても，まだまだできることは残されている。そのような思いを抱かせてくれる一冊である。

（門井直哉）